

温故知新

日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化で彩られています。温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

大字豊田

大字豊田は、必佐地区の中央やや西寄りに位置し、東・西・南の三方を大字中山に囲まれ、北は大字増田に接しています。字域の東側を日野川が北流し、水口丘陵に属する低い丘陵地となっている南側に集落が集中しています。小字地名からかつては山であったことが明らか

な字「上ノ山」は西山団地、字「向山」は東山団地として昭和50年代に住宅地として整備されています。かつて「下の庄」と呼ばれていた当地は、南西に位置する中山の古刹金剛定寺の門前に成立した集落と推定されています(『滋賀県の地名』)。正保2(1645)年には中山村の領内に組み込まれて枝郷となっていたことが確認できますが、明暦3(1657)年の「江州蒲生郡之内中山村御検地帳」(金剛定寺文書)の中に「川田村」と記されており、枝郷とはいえ一定の独自性が認められていた様子がみえます(『近江国蒲生郡中山川田村関連文書』)。

明治12(1879)年4月10日、中山村から豊田村として分離・独立しました(『近江日野の歴史』第四巻近現代編)。

多聞神社の多聞天像

大字豊田の鎮守社として字「後谷」に鎮座する稻荷神社の境内には、古くから近年まで「小宮さん」として親しまれてきた社があります。

中世、村人の守護神として里浦の森の一隅に祠を設けて信仰されたことがはじまりとされています。

多聞神社(豊田)



室町時代に造像されたと思われる像高18センチメートルの秘仏である多聞天像は、応仁の乱のころ、京から中山の金剛定寺に避難してきた4人の公家が信仰していた念持仏と伝承されています。

昭和63(1988)年2月、改築の際に小宮さんは「多聞神社」と改称され、鎮守稻荷神社とともに大切に守られています。

伝統が息づく「鯖の尾の草履」

明治10年代初頭の「滋賀県物産誌」によると、豊田村は全戸が農家で、農閑余業として草鞋・草履等の製造・販売をしていたことがわかりますが、当村の生業に関わるものとして馬見岡綿向神社(村井)の宮司たちが日野祭の際に使用する「鯖の尾の草履」の伝承があります。

蒲生氏が日野一帯の領主であったころ、当地の住人が正月等の祝事の際に城に出向き、城内で祝賀の踊りや歌等の芸能を披露するとともに、城主が履く鯖の

尾の草履を献上していました。ところが、天正12(1584)年に蒲生氏が伊勢の松坂に国替えを命じられ、日野を去ることになりました。このとき、別れのあいさつに行った左近家に対して、領主の氏郷から正月に献上してくれていた「鯖の尾の草履」は、今後は日野祭へ献上するように命じられたと伝わっています。

こうして翌年の天正13年から左近家により本祭の早朝に宮司に届けられるようになつたとされています。現在でもその伝統は個人宅に受け継がれており、毎年宮司家に届けられています(『ふるさとの文化財』その③)。

この草履は、藁草で編んだ草履の後部が鯖の尾びれのように高く跳ねていて、ところからこの名で呼ばれており、古い形をとどめたものとされます。蒲生氏が保護した芸能集団との関連とともに今に続くこの伝統は歴史を秘めた日野のたからの一つです。



鯖の尾の草履

問

近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」

☎ 0748-52-0008